



周術期感染対策

石 志 紘[†]

IRYO Vol. 75 No. 5 (465–469) 2021

【キーワード】手術部位感染症，遠隔部位感染症，予防的抗菌薬

はじめに

周術期感染症は主に手術部位感染症（surgical site infection : SSI）と肺炎，尿路感染症，カテーテル関連感染症などの遠隔部位感染症（remote infection : RI）の2つに大別される¹⁾が（図1），どちらも患者の身体的・精神的苦痛を増すばかりか，治療にともなう入院期間の延長，医療コストの増大など多くの不利益を被る。SSIに関しては全国的にサーベイランス²⁾が行われており（図2），サーベイランスを行うことにより自施設の現状を把握し，適切な対策を検討・導入してその発生率の低下を図ることが多くの施設で実践されている。RIに関してはサーベイランスが行われている施設がまだまだ少ないが，今後，必要性が増して来ると予想される。

周術期感染対策，特にSSIに関しては，国内外の組織や各学会から，術前，術中，術後と周術期感染対策のガイドラインが多岐にわたり報告されている^{3)–6)}。しかしながら，実際にはそのエビデンスレベルはまちまちであり，現在，広く取り入れられている主なもの（図3）について概説する。各施設の患者や疾患の構成，感染症の発生状況によってその対策は練られるべきであり，それぞれの対策内容の詳細

細については紙面の都合もあるため成書を参照していただきたい。

術前対策（外来－病棟）

対策は手術入院前の外来の時点から始まる。糖尿病患者の血糖値コントロール，歯周病のチェック・治療を含む口腔内ケア，禁煙指導など，必要があれば専門診療科へのコンサルテーションを考慮する。心・胸部手術や人工関節手術では，術前の鼻腔内MRSAの監視培養，ならびに保菌者に対する除菌を検討する。また，手術直前の入院とすることにより，病院内という市中に比べて感染リスクが高い特殊な環境への曝露期間を短くすることを心がける。入院後，病棟では全身および手術野の衛生状態を保つために術前のシャワー浴や，必要に応じて消毒薬によるシャワー浴なども考慮する。

術中対策（手術室）

手術当日は手術室内での徹底した感染対策が重要となる。手術の妨げとなるようであれば，ハサミやクリッパーによる最低限の除毛を行う。皮膚の消毒

国立病院機構東京医療センター 一般・消化器外科 †医師

著者連絡先：石 志紘 国立病院機構東京医療センター 〒152-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1

e-mail : seki.shiko.ea@mail.hosp.go.jp

(2021年8月31日受付，2021年10月15日受理)

Prevention of Perioperative Infections

Shiko Seki, Department of General and Gastroenterological Surgery, NHO Tokyo Medical Center

(Received Aug. 31, 2021, Accepted Oct. 15, 2021)

Key Words : surgical site infection, remote infection, antimicrobial prophylaxis